喧嘩禅

東郷　敏

東京オリンピックを前に沸きかえる三十九年の夏。ナリス化粧品（大阪市）の本社は三日間の臨時休業、全社員あげての参禅会を開いた。その日横浜・鶴見大本山總持寺門前の仏具屋から四トン積みのトラック、百五十人分の坐蒲や作務衣、鉦、太鼓、打板などが運びこまれていた。村岡満義社長（故人）の「本立ちて道生ず。これが基本や」という一言による。日課も起床から就寝まで本山の規則どおりとする。この参禅会の指導には本山からひとりの雲水をまねいていた。

当日、広い会議室はにわか禅堂に一変。〝堂内〟はピーン、と張りつめる。雲水がおもむろに坐香を立て、引磬三声。そのまま止静の世界に入った。会社にとって歴史的な一瞬。

数秒して私は下腹部の印をほどき合掌。警策を乞うポーズをとる。静かに背後に回った雲水警策を構え、威儀に満ち強烈な一打を私の肩に打ちすえた。下腹に万心の力をこめ、その痛棒を待ち止めた。その瞬間警策棒は真二つに折れ

とび散ってしまった。その間、別のだれかが合掌する。警策を受けまたすぐ私も合掌した。これに引き具されるように堂内のあちこち、やがて全員が合掌し雲水に警策を乞う姿となった。もう手がつけられない。座が進むごとに修羅場と化す。

このとき、雲水は二十六歳。私も二十六歳。

やがて私のみならず幹部社員の肩から血が吹き出し作務衣を染める。作務衣を血染めにした者が十人を越えていた。一方尋常でない状況にひとり立ち向かう雲水。息を荒らげ、肩で喘いでいる。顔から汗が飛び散り足はよろよろ。打ちすえる警策の狙いもやがて定まらなくなり、警策の握り手も血汐に染まる。手のひら一杯のマメがはじけていたのだ。

「ヤメローッ！　ばかもの、おまえらのやっているのは坐禅やないッ！　喧嘩やないかッ！」

社長の一喝。堂内は静まり返った。その中でだれかが、羯諦羯諦波羅羯諦…、と称えた。やがて、それは全員による『般若心経』の大合唱となり、社員同士、また雲水と抱きあい感動を共有する。

これは私が仕組んだ雲水に対する果たし合いだったのである。その僅か十日前、社長のツルの一声、幹部社員七名社長に連れられ總持寺の夏季摂心会（八日間）に参加した。私も立場上しかたがない。給料のためとしぶしぶ従う。それでもなんとかごまかし大阪に帰ってこようという気持ちだった。ところが禅堂に入るとその異様な環境にド肝を抜かれる。遂に逃げ出す機会を失う、わけのわからぬままに。ただ「坐る」すわるだけなのに私は半跏趺坐さえ満足にできなかった。この雲水「だからキサマは生半可なのだ」という。そんな状況で何日たっても腹は坐らず、思いは支離滅裂修行どころではない。

求められる感謝報恩の心など爪の垢ほども出てこない。しかも朝から晩まで規則づくめの生活。こんな環境を自ら求め修行とやらをしている変わり者がいることに、心底驚く、その一人が先の雲水。なにもここまでせずとも、相応の人間になれる方法はいくらもあるだろうにと。

禅堂には相当数の雲水がいて警策をふるう。その中に容赦のない、骨を砕かんばかりの警策を振う雲水。ある時たまらずに振り返ってみる。するとその雲水、私の背に合掌している。おや？

と思う間もない。

「コラッ！たるんどる。キサマッ、死ねぇ!!」

堂を真二つに割る罵声。瞬間、私の体はたしかに弾け上がったのである。クソッ!!

「教えずして殺す。これを虐と謂う」

かの孔子先生の言葉だ。まさにその通り！私は囚われの身。この場では手も足も出ない。しかも、ひたすら私に狙いをつけているとしか思えない。なにか仕返しの手立てはないものかと。そればかり考えるようになっていた。社長に話すと、

「お前の目は節穴か。あの雲水こそわしが求めているお方。なあ、トーゴ。人の吐く言葉はその人の心の現われ、その人の全人格をあらわしている。人を叱る、人を直す、人にムチを入れるのは、並の心掛けと修行でできるもんやない。あの方にはそれができる。エライッ！」

ところが丁度そのとき、ふらっと彼の雲水が部屋に入ってきた。堂内とは別人のようだ。話してみると人柄の温かさを感じなくもない。実に天真爛漫。私は新鮮な感動さえ味わった。しかし、仕返しの考えを捨てたわけではなかった。總持寺を出て三日後、幹部十七人の協力をえて、その雲水を会社で待ち受けていたのである。以来ことあるごとに雲水と社員の闘いは続き、休むことはなかった。

あの事件があって三年後。海外修行を終え帰国した雲水。寺を建てたいと打ち明ける。行き掛かり上仕方ない受けて立つ。私は、にわか勧進聖（ひじり）となり、仕事にからめ三カ月間全国を飛び回わり、約千四百名の方から一千万円に近い寄進を受けた。村岡社長も大口の喜捨。甲斐あって昭和四十四年ついに善光寺（横浜市）が創建されたのである（開基村岡満義）。

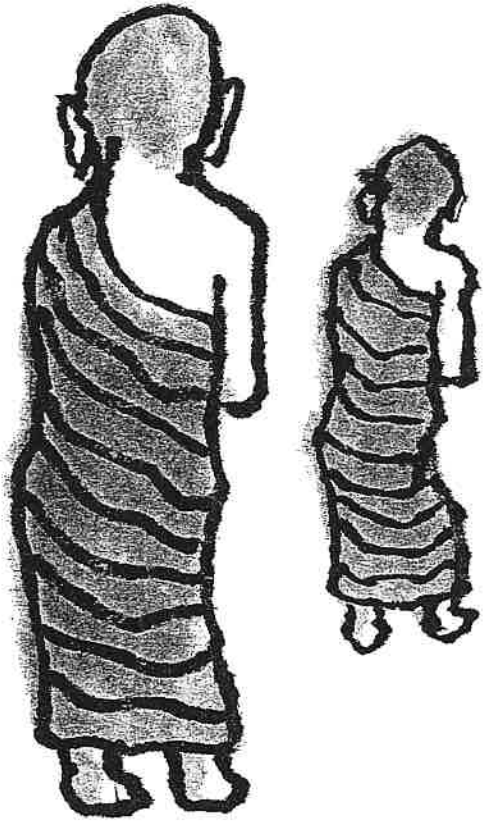
「寺のため嫁の存在は欠かせない」ということで、社長の命もあり、社長秘書の加藤原倫子（みち）さんをお世話した。

横浜善光寺はいまや檀家三千五百。関東屈指の大寺である。鴉（からす）の啼かない日はあっても「ミチコ、ミチコ」と方丈（住職）の妻を連呼する声の聞かれない日はない。

倫子夫人なくしてもはや方丈も、善光寺もない様子である。

十五年前、開創三十年を期に檀信徒の「ひと口べらし」の浄財により横浜善光寺留学僧育英会を発足させる。宗派・男女・国籍を問わず海外二十カ国、百名以上の留学僧を送り出し、また受け入れている。

かつての雲水、黒田武志方丈は仏道に全身全霊を投じ、ただひたすら人心救済に燃焼する。いまの世の傑僧であると私は信じ仰望（ぎょうぼう）する。この師友との篤い「出逢い」に心から喜びをもつものである。これこそ道元の謂う「われさいわいにして人と逢うなり」か。

東郷　敏　成寿堂ナリス化粧品顧問。昭和12年、鹿児島県生まれ。31年、鹿児島商業高校卒業後、ナリス化粧品入社。同社常務取締役をへて、平成9年、退社。

（'01春号「禅と念佛」に掲載されたものです）